
不器用なチョコレート

ししとう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不器用なチヨコレート

【Nコード】

N1507G

【作者名】

ししとう

【あらすじ】

袋一杯のチヨコレートを持ったコナンはとても不機嫌だった。その理由とは？

コナンはひとり、うな垂れていた。

今、時期はバレンタイン一色だった。町を歩けば右も左も、カッブルだらけだった。雪が空を白く染め上げ、町の雰囲気はロマンチックに仕上げていた。

そんな中を不機嫌そうに歩く一人の少年がいた。

江戸川コナンは袋一杯のチョコレートを持ち歩きながら、歓喜しているのではなく、不機嫌な様子で家路を辿っていた。

「はあ・・・」

大きなため息をつきながら白い息を大きく吐いた。端から見れば、彼は勝ち組に分類されるであろう。しかし彼は、見るからに不機嫌であった。

その理由は彼が欲しがっていたチョコレートは貰えなかった、好きな女の子からは貰えなかったのだ。

彼の欲しかったチョコレートはクラスメイトの吉田歩美のチョコレートでも、幼馴染の毛利蘭からのチョコレートでもなく、灰原哀という女の子からのチョコレートであった。

コナンは哀がバレンタインをするような可愛い女の子ではないことはなんとなくではあるが、予想をしていた。

しかし、本当に貰えなかったことにひどくがっかりした。学校に行き、コナンはまず初めに、下駄箱を調べた。数個、包みに入っているチョコレートがあった。しかしその中に、哀からのチョコレートはなかった。

そして次に調べたのは机の引き出しの中。休み時間になるたびにコナンはわざと教室を出て、自分の机前を空けた。そして帰ってくるたびに、机の中を調べた。その中にも哀からのチョコレートはなかった。

そして放課後となり、結局哀からはチョコレートは貰えなかった。

その代わりにほかの女の子からの大量のチョコレートが袋一杯になつていた。欲しかったものは得ることは出来なかった。空しい気持ちに彼を支配した。

家路を辿っていたコナンは、ふと、気がついた。コナンの後ろに誰かが立っていることに。

気配を殺しながら、ひっそりとコナンの後をつける気配を。

コナンが二歩歩けば、気配も二歩歩く。コナンが三歩歩き、一歩止まると、気配は影のようにそれを真似る。

コナンの目の前に、曲がり角が見えた。コナンはにやりと薄ら笑うと、しばらくの間、その場に静止した。そして突然、風を切るように走り出した。

気配は慌ててコナンの後を追う。そして曲がり角を曲がると、コナンはその気配の主を捕まえた。

気配の主は、コナンのよく知る人物だった。

薄い茶色のセーターを身に纏っていたのは、

「は、灰原……？」

コナンに腕を掴まれ、哀はしまったというような表情をしながら顔を横に背けていた。しかしコナンに腕を掴まれ、逃げることも出来ないで、全くの無駄なことだった。

コナンは以外の気配の正体に少々、呆気に取られていた。

「……離してくれる」

哀はいつもの調子を取り戻し、少し上からの物言いで、コナンに言った。

コナンも意識が戻ったように顔を赤くしながら、慌てて哀の腕を離した。

街角でふたりの子供がもじもじとやりとりをしていた、周りから見れば初々しいのであるが、ふたりにとっては視線など、気になるのを忘れてしまうほど、動揺していた。

話を切り出し始めたのはコナンであった。

「なんだよ」

と一言だけであつたが、コナンは心臓が張り裂けそうであつた。心のどこかで期待しているからだ。

コナンの一言に哀はしばらく黙っているままであつた。コナンと哀の周りの空気だけが重量というものを覚えたかのように、どんどん空気が重くなってきた。そして哀は、少しだけ頷くと、コナンにこんなことを聞いた。

「・・・工藤くん。喉・・・渴いてない？」

コナンは再び、呆気にとられることになった。コナンは必死に心の中で落ち着けと言ひ聞かせていたのだが、哀の口から発せられた言葉は、チヨコではなく、喉が乾いてるか、だつた。

コナンは呆気にとられているまま、口から言葉が漏れた。

「あ、ああ」

喉が渴いていると返事をした。その言葉を聞き、哀は鞆から缶ジュースを取り出し、それをコナンの胸に押し付けた。コナンはそれを手で受け取つた。缶は冷え切つていて、とても冷たかつた。

哀はコナンに缶ジュースを手渡すと、慌てて走り去つていった。

その場にはコナンと缶ジュースだけが残つた。

「な、なんなんだよ？」

と、ぼやくコナンは哀に手渡された缶ジュースを見てみると、それは缶に入っているココアだつた。

冷たいココアなどあまり見たことはなかつた。そしてあることに気付いた。自分に都合のいい解釈を

「これつて・・・チヨコレート？」

同じような材料だし、いいか。などと都合のいい解釈を。そして歡喜あまつたコナンはその場で威勢のいい声を上げた。

「や、・・・やったー！」

すぐに缶を開けたコナンはそのココアを飲みだした。冷え切つたココアはとても暖かつた。心の中で暖かくしてくれるようだ。

そんな哀の不器用なチヨコレート

(後書き)

時期が時期ということ、書かせていただきました。作者にはまったく関係のない時期です。・・・書いていて何だか空しくなってきました。楽しんでくだされば、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1507g/>

不器用なチョコレート

2010年11月2日14時09分発行